

# 信長に仕えた森一族の末裔を訪ねて

## ～江迎町鬼突にやってきた森休可の足跡を辿る～

□主 催:佐世保史談会

□場 所:佐世保市立図書館3階 視聴覚室

□日 時:令和2年2月22日(土) 14:00～

□発表者:垣田 鉄郎

### はじめに

今回は以前より気になっていた江迎町にある森蘭丸の一族の子孫が住むという家を訪ねた。

北松浦郡佐々町から江迎へと抜ける江里峠を北東へとかなり細く険しい山道を進む、こんなところに民家があるのかと疑うような道だった。しばらく進むと幾分視界が開け民家が見えてきた。どれも敷地が広く古くからの民家のような。その途中、佐々町と江迎町の境界に椎の大木があり、根元に木札が何枚も置かれていた。古い習わしであると前に聞いたことがある。**初祈禱**(はつぎとう)と呼ばれる習わしで、椎の木を削った辻札を年に1度、お正月にお祓い祈願して、村の境目に辻札を建てる。様々な疫病が入ってこないようにと願う昔ながらの風習がまだ続いているようだった。椎の木を過ぎ、少し下ると目的地の森邸に到着した。

見事な紅葉と「おにづきまたたびの里」と書かれた木の看板が私たちを出迎えてくれた。ここは、テレビでも紹介され、テレビCMのロケ地としても使われたことのある紅葉の名所として知る人ぞ知る場所であった。

敷地への入口から屋敷までは紅葉の道で、その先に手入れの行き届いた日本庭園が広がっていた。屋敷の廻りには樹齢何百年にもなろうかという大木がいくつも聳え、歴史を感じさせる。広大な敷地にはマタタビ畑や炭焼き小屋などがあり、学生等が体験学習の場として宿泊できる(民泊)としても提供しているということであった。

とても穏やかな表情のご主人の森基一郎さん(75歳)が出迎えてくれて、私たちのために、囲炉裏に火をおこし、お茶菓子を頂きながらお話を聞くことができた。



境界に建てられた辻札

## 森家の系統

織田信長の小姓として本能寺の変で討ち死にした事で知られる森蘭丸には兄弟がいた。

森兄弟の父である**森可成**(よしなり)は尾張の住人で齊藤道三に仕え、道三の死後、織田信長の家来となる。知略武功に優れていたのが信長に求愛されていた記録が残されている。元亀元年(1570)、可成は朝倉義景の籠もる筑前の手筒山城を攻めたが、その時長男の**可隆**(よしたか)も共に出陣した。19歳の初陣だったという。城への一番乗りを果たし、初陣にして大手柄を立てたが、若さのためか深追いしすぎて戦死してしまう。同年、父親の可成も戦死したため、わずか13歳の二男の**長可**(ながよし)が家督を継ぐことになり、のちに「鬼武蔵」と恐れられる戦国きっての猛将となり、弟の蘭丸・坊丸・力丸等と共に信長を支えていく。しかし本能寺の変で信長が自決し、その後起こった小牧・長久手の戦いにて長可は戦死する。天正12年(1584)27歳であった。

通説では今回お話を聞かせていただいた森基一郎さんは、森兄弟の二男・**長可**(ながよし)の子孫にあたる。江迎町郷土史にも「長可には息子がいて名を休可という、長可が小牧山の合戦で戦死したのち、子の休可は阿波の国へ落ち延びたが、阿波の国内乱が起こり船にて阿波を後にして平戸の国に来て、男子四人召し連れて鬼突に定住したのである」としている。

だがそうであれば休可の墓に刻まれた命日の元禄十年(1697)と長可が戦死した天正12年(1584)には110年以上のひらきがあり、休可が長可の息子であるというのは合点がいかない。

今回森さんとの話の中で、そのような疑問を少し払拭することができた。

森さんによるとどうやら江迎にやって来た休可の父親は長可ではなく、長男の可隆だったとのことである。しかしながらそれにしても可隆が手筒山の戦いで戦死したとされる元亀元年(1570)と休可の命日元禄十年(1697)の間には120年以上のひらきがある。長可同様、休可が可隆の息子であるはずがない。だがその謎が解ける文言を森さんから見せて頂いた資料の中から見つけた。その史料は森さんを含む森休可の子孫の方々が集まって平成15年に開催された「森家一族の会」において各自が持ち寄った史料のひとつらしかった。

それによると、

ここに休可公の身分を実証する今では唯一の書状が発見された。

徳島県立図書館所蔵の慶長二年(1579)の分限帳に、

**森九花知行分**

**名西 森伝兵衛可隆**

**国実百石 森伝右衛門休可**

この一頁が見出された。森可成の嫡男伝兵衛可隆は天文二十二年(1553)生。元亀元年(1570)四月、越前手筒山に於て討死十九歳とある。元亀元年は永禄十三年で、郷土誌に(江迎町郷土史の事だと思われる)「事故ありて永禄の頃この地に転籍す」とあるのは戦死したはずの可隆が阿波の同族を頼り、この地に隠棲したことを暗示しているものと思われる。なお同地にはこの伝承が残っていると言われる。可隆公と休可公は父子の関係であることが判明したと思われる。

森マツエさん執筆「隠棲に生きた父子二代」より抜粋

( 森マツエさんは休可の二男からの子孫にあたる方で、江迎町赤坂にお住まいであった。浅草の永見寺まで出向いて森家の系譜を調べたり、熱心に研究されていたようだ。お話を伺いたかったが、現在はご高齢で施設に入っておられるとのことであった。 )

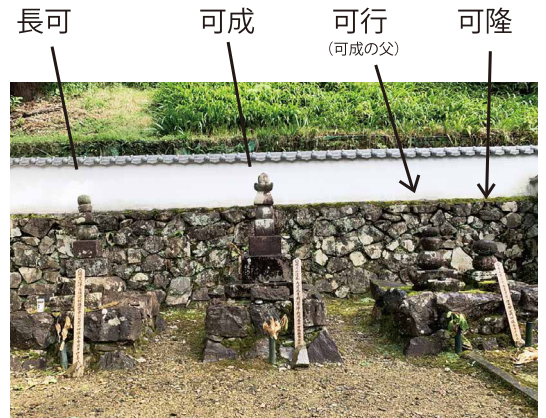
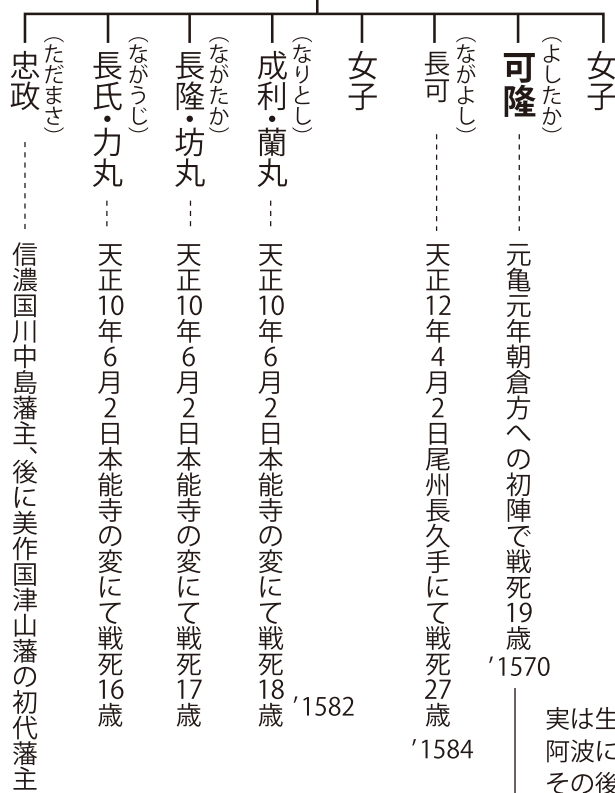


ようするに元龜元年(1570)年に戦死したはずの**森可隆**は阿波国に落ち延び、息子の**休可**と共に暮らし、おそらく阿波で亡くなったと思われる。その後**休可**は四人の子どもを授かるが、内乱により巻き添えを恐れるため阿波を脱出し難を逃れ西の果ての地へたどり着いた。

一説によると平戸藩の熊沢家老を頼って平戸に着くも、森家という名家の自尊心からか、森一族を恐れる平戸藩から逃れるためか、江迎川を一里ほど溯り、さらに支流を上って海拔350m程の人目に付かない山奥で隠棲生活を送ったという。

森可成の子供たち

森可成 よしなり



岐阜県の可成寺(かじょうじ)にある森家のお墓  
上記のお墓の側に蘭丸・坊丸・力丸のお墓もある。

実は生きていて  
阿波に隠棲する  
その後、休可が生まれる

休可 (きゆうか)

墓石に刻まれた文字

元禄十丁丑年 瑞照和上休可禅玄信士 二月十五日

これにより休可の出生年は不明だが  
元禄十年(1697)2月15日に亡くなったと思われる

休可の子供たち

森休可

- 長男 金田川の森家 ..... 現在、子孫の方は佐世保市内に住まわれている  
生家跡地は現在無人の作業所となっている  
生家跡地の上に墓地があるが現在は藪化している
- 二男 赤坂の森家(次郎左衛門)..... 今も赤坂地区には森性が多い
- 三男 山の田の森家 ..... 現在は途絶えている
- 四男 ①貞衛門 — ②兵蔵 — ③類衛門 — ④兼助 — ⑤要吉  
⑥強四郎 — ⑦強三郎 — ⑧慶太郎 — ⑨幸夫 — ⑩基一郎 --- ⑪慎太郎
- 五男 江戸 浅草 永見寺 十八世泰俊貫道大和尚となる  
(鬼突にあるお墓は空墓で、実際の墓は江戸の永見寺にある)

## 烽火の地

杉の元といわれる地区には休可が初めて江迎の地にやって来た時のエピソードが言い伝えられている。阿波の国の内乱により、船で平戸に辿り着いた休可家族はその後、平戸からふたたび船で江迎川をさかのぼり、赤坂（江迎町赤坂）にたどりつく。家族（妻及び男子4人）を赤坂に残し、休可は定住の地を求め鬼突（おにづき）の山へ向かった。当時の山は獣が潜む大原始林、江迎川の支流、金田川をさかのぼって道無き道を進んでいった。

赤坂をたつに先立ち、家族に向かい「あの山を永住の地としたいが人跡未踏で何が潜むか分らん。住めるようだったら烽火を挙げる、これを見たら住めるものと思って皆登ってこい。もし烽火が挙がらなかったら、猛獣にかみ殺されたものと思いついて登ってきてはならぬ」と言っておいた。無事に山の中腹まで登り着いた休可は、人の住める所と見定め、烽火を挙げ家族を呼んだ。それ以降この地に永住し、子孫を増やしていった。

現在も休可が挙げた烽火のかまどを見ることができる。その場所は森邸より江迎方面へ少し下った場所であり、整備されていた。昭和32年には杉の元部落の人の手によって記念碑も建てられた。そこから観る今の景色は木々に視界がさえぎられ麓まで見渡せないが、森さんが幼い頃はもっと広く遠くまで見渡せていたという、休可が来た当時の景色はどうだったのだろう。乱世の時代、遠く尾張の国から阿波の国を経てこの地に流れついた森一族の末裔の休可。この地に永住しようと決意した休可はどれほどの想いでここから烽火を挙げたのだろう。



烽火の地からの景色



## 八幡神社

烽火の地の近くに八幡神社(はちまん)がある。

休可が阿波の国から退散しようとして八幡の守護神へお別れに参拝しに行ったとき、社殿の天井から落ちてきた指槌(さしづち)をこの地に持ってきて、ご神体として祀ったのが八幡神社の始まりである。今でもその指槌(さしづち)はご神体として保管してあるという。

八幡神社の下に施設があるがその場所が休可の家族が最初に住んだ館跡地で、休可の長男の子孫の方が今でも管理しているとのことだった。この場所から江迎の森一族は拡まっていったのだろう。まさに森家の原点であり、出発地である。



八幡神社



石碑に刻まれた森一族の名前

## 休可夫妻の墓

森邸の敷地に休可夫妻の墓地がある。3基の立派な墓石が現在の森家の墓とは離れた場所にあり、向かって左が休可の五男で浅草の永見寺の管長となった貫道大和尚の空墓(実際の墓は浅草永見寺)で中央の奥が休可。右手前が休可夫人の墓石である。

休可の墓石には元禄十丁丑年二月十五日(1697年2月15日)の日付が刻まれていた。

元禄十丁丑年  
瑞照和上休可禅玄信士  
二月十五日



石碑に刻まれた文字



中央の奥が休可。右手前が休可夫人の墓石

左が休可の五男で浅草の永見寺の管長となった貫道大和尚の空墓。



## 鬼の岩屋(鬼突の云われ)

この地で子孫を増やしていった森一族は、慶応の頃まで藩に仕えることを潔しとせず、ひたすら隠棲生活を送っていたという記録がある。もしかして鬼突(おにづき)という地名も人を寄せつけないための防衛手段として鬼の住む(鬼付き)山里の噂を流した結果、その地名が今に残っているのかも知れない。この地には鬼にまつわる昔話が残されていて、鬼の岩屋(鬼突洞窟)という場所は休可家族が移住してきた際、落ち着くまでの仮の住まいとした場所という逸話も残っているが今は天井部分が崩落して洞窟は見ることができないとのことであった。

今回せつなくなので見てみることにした。森さん宅から猪調に抜ける林道の途中にそれはあったが、藪化して林道からはその姿は拝めない。とりあえず近くまで行ってみようと藪をかき分けて洞窟の側まできたが確かに大きな石が散乱しその上枯れ葉が積もっていてとても洞窟とは言えない姿であった。これでも以前は地区の方が「彼岸の入りの日」に参詣していたとのことであった。



鬼の岩屋

## さいごに

最後に森さんの屋敷に保管されているという、森家に伝わる武具をみせて頂いた。槍、木棒、なぎなたの柄の部分など刃の部分は戦時中の金属類回収令によりなくなったとのことだった。更に囲炉裏小屋に保管してあった「あぶみ」を見せて頂いた。漆塗り緑色で竹の文様が彫刻されたもので、森さんが知る限りでは馬を飼育していた記録はなく、これらの武具は、森さんが生まれる以前から、森家に代々伝わってきたもので、記録も残されていないため、詳しいことは分からないということであった。もしかしたら農民が持つような物ではないこれらの武具・馬具は、森休可様がこの地へやって来た際に、所持していたものなのかもしれないとのことであった。

明治10年に建てられた今の森家の梁は10m程もありそうな大きな松の木を使っている。それ以前の江戸時代はおそらく大きな松の木が沢山生えていただろうとのこと、現在とは見る景色が違っていただろう。森さんが小さい頃でも、まだ家の周りに大木が茂り鬱蒼としていて周りが見えないくらい暗かったという。生活道も今とは違う道を使って麓まで降りていたらしいが、今はもう藪化してその道は判らなくなっている。昭和50年頃に今の舗装された道路が通り、ようやく生活しやすくなったとのことであった。

度々の訪問にもかかわらず、その度暖かいおもてなしをしていただき、烽火の地やお墓への案内までしていただいた森基一郎さんと奥様には本当に感謝いたします。



森家に伝わる武具(槍・木刀など)



あぶみ(馬具)



# マタタビの里 おにづき 周辺マップ

